協議資料３

5/30　第３５期新潟市社会教育委員会議（第１回）
意見交換の概要について

文責：新潟市生涯学習センター

【清水委員】
・現在、小学校、中学校、高校、大学、専門学校、特別支援学校の児童生徒が職場体験に来ることが多いが、企業の学校に対する理解は低く、学校（教員、地域教育コーディネーター）にとって企業の敷居は高いと感じられがちである。
・大きく「企業と学校のかかわり方」ということを考えていけたらよい。
・今、東区は産業のまちというコンセプトを掲げている。東区なら産業に特化して「仕事やお金に関する教育」を行うなど、各区の特色・地域資源を生かして連携していくことが大切。
・小学校のＰＴＡ会長として、悩みながら活動を行っている。例えば講演会をやりたいというときに、生涯学習センターの力を借りるなどして地域人材のネットワークをつくることができれば、ＰＴＡも、もっとおもしろいことができるのではないかと感じている。

【雲尾議長】
・中学校のＰＴＡ会長をしていた時のＰＴＡ規約には、子どもの健全育成だけではなく、「会員の資質を高める」という一文があった。そのため、ＰＴＡ会員の親睦を深める活動を継続し、会員の資質が高まってきた。規約は大切なので、例えば各区ＰＴＡ連合の規約などの表記について支援、整備をすることも、社会教育団体に対しての支援と考えられるのではないか。

【司山委員】
・高校の地域教育コーディネーターは、横の情報交換が難しい。どのように地域連携をしていけばよいのかというところで悩みながら進めている。
・子どもたちを育てていくという部分で、教員や地域住民などいろいろな人に社会教育や地域と学校が連携していくことの大切さを知ってもらいたい。どうすればすそ野が広がり、活発になるのか。今、コーディネーターの研修会も定期的に行われているが、もっと突っ込んだ話ができるような勉強会などの機会がほしい。

【竹田委員】

・人口減、人口流出にかかわり、教え子が進学等を機に新潟を出ると、その後、戻ってこないということが話題になっている。優秀な人材ほど新潟を出て行ってしまうという現状がある。

・例えば、「自分が岡方（地元）に生まれ育ってよかった」ということを子どもに思ってもらいたいというのが、ふれあいスクールの一つの考え方。いったん進学で外に出たとしても、また岡方（地元）に戻ってくる人材を育てたい。（秋葉区での祭りの話を例に）

【山岸委員】

・社会教育施設の「施設」というところが気になっている。施設となるとその場所を指すことが多い。子ども子育て会議であったり、自治協議会であったりいろいろな分野でいろいろな人がいろいろ考え、活動しているが、地域は一つ。子どもたちが魅力を感じるような地域になっていく視点で他と一体となって社会教育もかかわっていく。

・「子どもたちが魅力を感じるような地域になっていく」という視点で社会教育もかかわっていく。「学・社・民の融合」の取組が始まって１５、６年が経ち、当時の子どもが大人になっている。その時にかわいがられた子どもたちは、その後、いろいろな意味で地域に還元している。自分の子どもは、子どものころに体験したことを今でも覚えていて、故郷を自慢に思っていることが言葉の端々から感じられる。

【白神委員】

・図書館の敷居が高いと感じている人がまだ多い。そういう現状の中で、いかに図書館が楽しい場所であるか知ってもらいたい。漫画でも絵本でも自分にぴったりくるものが図書館にはある。教育ビジョンにある市民との協働にもつながると思うが、（市民が）敷居の高さを感じていることを「そうではない」と伝えられるとよい。

【小倉委員】

・今、これまで本流でなかったところ、マイノリティであったところの幅がどんどん広がっているのではないか。マイノリティな部分の幅が広がっている部分も見据えながら、それをどう捉えていくかというところを今後考えていくことが必要。

・学校の地域教育コーディネーターや地域団体が学校を支える仕組みについて考えたい。総合学習（田植え体験）の受け入れ団体として取り組んでいるが、学校から頼まれていないと動けない状況があり、少しもどかしさを感じている。（５月に田植えなのに４月に教員の異動があり新学期にならないと活動がどうなるのかわからない、など）

【佐藤副議長】

・「生き抜く」「標準」という表現から外れた人を支えていく社会教育の在り方を考えていくことも必要ではないか。「ケア」「弱さ」「マイノリティ」などの視点も大切にしながら進めていけたらよい。

・素朴に毎日が楽しいと思える学びは何か、学校や地域の中でそういう場を保障できたらおもしろい（デンマークの学校を例に）。

【角野委員】

・社会を取り巻く状況が変わっている中で、新潟市の社会教育が何を担っていくことが大切か、一つ一つ整理したい。

・今の世の中には余白がないと感じている。多様な価値をもつ学びの場が世界のいろいろな場で起こっている。今、新潟に何が必要かという視点で考え直したい（北欧のフォルケホイスコーレを例に）。

・人口流出の話題にかかわって、高校までの段階で挑戦体験をつくれるとよい。「新潟は自分が挑戦できる場なのだ」という実感があると、いつか新潟に帰ってきて挑戦しようという子が増えるのではないか。

【木村委員】

・立場によってものの見方が変わってくる。いろいろな意見がある。それを整えてみてはどうか。私たちが学んだことを市民の人たちにつなげていく。→大人の学びの展開